# 鳶色の靄の彼方に

## ―『その前夜』の翻訳と受容をめぐる試論

相沢　直樹

### はじめに

日本の近代文学の発展にツルゲーネフが大きな影響と寄与を果たしてきたことは、今日広く認められている。しかし、二葉亭四迷の『あひゞき』（明治二一年＝一八八八年）の登場があまりに衝撃的な事件であったためか、わが国におけるツルゲーネフ受容をめぐる研究（1）は、『猟人日記』や『散文詩』の中の個々の短篇を主要な対象としたり、長篇小説を扱う場合も（時代により力点の置かれ方は異なるとしても）『ルーヂン』、『父と子』と『処女地』への関心の集中が見られ、『その前夜』はこれまであまり注目を集めて来なかった。

しかし、『その前夜』は明治時代のわが国で最初に完訳されたツルゲーネフの長篇小説（2）であり、以後この小説については昭和に至るまで連綿と様々な翻訳が発表されて来ている。また、『その前夜』という作品がわが国の文学者たちに影響を与えたり、創作上の刺激となった可能性も看過できない。多くは英語・日本語による翻訳や作品紹介を通しての受容や理解と推測されるが、ここにはわが国におけるツルゲーネフ受容のひとつの形が窺えるように思われる。

本稿では、『その前夜』受容史研究の一環として、日本におけるこの作品の翻訳のされ方、わが国の文学者たちによるこの作品の受容のあり方について考察してみたい。

### 1．明治期の翻訳から『その前夜』劇まで

#### 明治期の三つの『その前夜』

ツルゲーネフ（一八一八～一八八三）は生涯に六篇の長篇小説（ロマン）を残した（3）。その中で『その前夜』（一八六〇）は三作目に当たるが、明治時代のわが国では、興味深いことに、この小説の様々な翻訳が発表されていた。多くは部分訳であるが、驚くべきことに、完訳も二つ存在した。

ひとつは明治二二年（一八八九）に五七居士（佐波武雄）によってロシア語原典から翻訳され、雑誌「やまと錦」に連載された『あさしの花美さほ草紙』（4）で、これは『その前夜』の最初の日本語訳であるのみならず、ツルゲーネフの長篇小説すべての中でわが国で最初に完訳されたものでありながら、長く忘れ去られていた。

もう一つは相馬御風がコンスタンス・ガーネットの英訳から

重訳して出した『その前夜』（明治四一年＝一九〇八年）で、刊行以来わが国で広く読まれ、石川啄木ら文学者を刺激して実り多かった。

また、邦訳ではないが、ガーネットによる英訳の *On the eve* の意義も見逃すことはできない。これは明治二八年（一八九五）にロンドンで刊行されたが、この翻訳を含む彼女の『イワン・ツルゲーネフ小説集』全一五巻は、田山花袋・國木田独歩・島崎藤村ら若き文学者たちを強く刺激し、文学的開眼をもたらしたとされる（5）。

## 楠山正雄の脚色

一方、大正時代に入っても『その前夜』に対する関心は衰えを見せず、相馬御風がガーネットの英訳から重訳した『その前夜』は、島村抱月が主宰する新劇団「芸術座」の楠山正雄によって脚色されて、大正四年（一九一五）四月二六日から三〇日にかけて、帝国劇場で松井須磨子の主演で上演された。

この劇はもちろんツルゲーネフの『その前夜』に基づいたものではあるが、原作とは趣を異にする所が多々ある。管見によれば、楠山正雄の脚本をツルゲーネフの原作小説と比較すると、以下のような六点が浮かび上がって来る（6）。

（1）人物や場面の設定の簡略化
（2）主人公インサーロフに対する期待の地平の後退
（3）原作の全篇に垂れ込めていた悲劇的予感の喪失ないし減退
（4）「新しい女」としてのエレーナ像
（5）「魔法の街」という性格付けを失ったヴェネツィア
（6）暗く物悲しい音楽の除外と新たな劇中歌の導入

右の（3）と（6）を裏づけるように、『その前夜』劇についての上演当時の劇評や記事には、この芝居を「春の夜の夢の如き暖き恋物語り」（大島寶水：「讀賣新聞」四月二五日）などと性格づけているものが散見されるが、こうした捉え方は、芸術座の幹部達による『その前夜』原作の捉え方をなぞったものと言える。

## 芸術座の『その前夜』劇と『ゴンドラの唄』

大衆劇による劇団経営の安定と小劇場での理想の芸術の追求という「二元の道」を標榜した芸術座の大劇場での演目の性格上想像に難くないが、『その前夜』劇はロシア通の玄人筋からはあまり評価されなかった。たとえば、ロシア文学にも造詣の深かった才人の内田魯庵はインサロフとエレエナが恋を語る場面の景色を見て、「彼（あ）れはどうしても露西亞（ロシア）の景色ではない、和蘭（オランダ）である」、「ツルゲーネフの好きな灰色は何處にも求められ

ない」と苦言を呈している（7）。

かと言って『その前夜』劇は大衆に支持されたとも言えなかった。島村抱月はいわば「妥協芸術論」の立場から、観客を芝居の世界に引き込むために、『その前夜』劇の上演に際しても音や光の変化を多用したりして舞台にインパクトを与えようとしたようだが、当時の劇評を見るかぎり、それが成功したかどうかは怪しい。

トルストイ原作の『復活』劇が大当たりをとって芸術座の危機を救ったのは、この前年のことだった。この時の劇中歌の『カチューシャの唄』の大流行に気をよくしたのか、『その前夜』劇にも大小五つの劇中歌が用意されたが、今日まで歌い継がれているのは吉井勇詞・中山晋平曲による『ゴンドラの唄』のみである。

トルストイの『復活』そのものに『カチューシャの唄』がなかったように、ツルゲーネフの原作小説にも『ゴンドラの唄』に当たるものは出て来ない。おまけに今回の歌はロシアではなくイタリアに関わる物だったので、時代をくだると『ゴンドラの唄』の出自、この歌とツルゲーネフの関係などはすっかり忘れられてしまった（8）。

芸術座の『その前夜』劇は、わが国における『その前夜』受容のひとつの頂点であり、副産物でありながら長く息づいている『ゴンドラの唄』は、その鬼子のようなものと言えようか。

## 2．革命と社会主義の影、あるいは田中純訳『その前夜』

### 「ツルゲーネフ全集」の構想

『その前夜』劇の上演から三年あまり過ぎた大正七年（一九一八）に、田中純が『その前夜』を訳して新潮社から出した。筆者の手許にある大正九年（一九二〇）の第八版の巻末にある広告を見ると、「ツルゲーネフ全集」として以下の六冊が挙げられている（9）。

（1）『猟人日記』生田長江訳
（2）『ルーヂン』田中純訳
（3）『初戀』生田春月
（4）『その前夜』田中純訳
（5）『煙』大貫晶川訳
（6）『父と子』谷崎精二訳

本のタイトルや副題に「ツルゲーネフ全集」と冠してある訳でも、第何巻と記してある訳でもないので、これは体系的に編集された厳密な意味での全集ではなさそうだが（10）、曲がりなりにもこの時点で「全集」が意識されていたことが分かる。

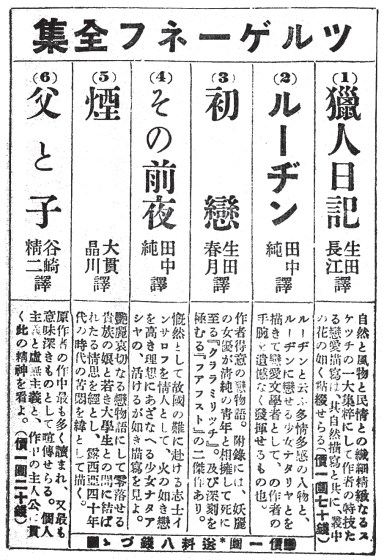



図 1：「ツルゲーネフ全集」広告（田中純訳『その前夜』より）

## 田中純の「解題」

田中純（一八九〇～一九六六）は早稲田の英文科の出身の小説家、文芸評論家、翻訳家で、クロポトキンの『露西亜文芸の主潮』の訳（大正六年＝一九一七年）など、早くからロシア文学の翻訳を手がけ、大正九年には同じく新潮社から『處女地』の翻訳も出している。『その前夜』の訳書には原典が明記されていないが、ガーネット等の英訳からの重訳と推察される。

この翻訳の冒頭には「解題」が置かれている。田中の見方には必ずしも当時のわが国の文学者たちに一般的ではない所もあるように思われるが、（いや、だからこそと言うべきか）この作品の本質をよく捉えているように思われるので、そのまま引用する。

「その前夜」はツルゲエネフが「ルーヂン」を書いてから四年の後、一千八百五十九年に書いたものであつて、ツルゲエネフの全作中、最も藝術的な感觸に富んだものだと言はれて居る。

此の小説は、見方によつては、「ルーヂン」の續篇だと言つても可い。無論、その筋の上には、何等の脈絡もないが、此の作の人物の性格には、それ〴〵「ルーヂン」からの或る發達が認められる。ルーヂンの理想主義に、容易に感激したあのナタリヤは、此の作に於ては、更に積極的な實行的な理想主義者エレーナとなつて現れて居り、言葉のみあつて實行のない理想主義者ルーヂンは、此の作に於ては、純粋な實行家で、鐵の如き手ざはりを持つ革命家インサロフとなつて現れて居る。而も、此の小説が世に出て間もなくして、かくの如き男女が、實際にロシアの全土に輩出して、それぞれの實際運動に着手したのであつた。その意味に於て、此の作は實に、來らんとするロシアの大革命の「その前夜」を描いたものであつたのだ。

此の作はこれ迄、様々に脚色されて、各國の劇場に上されて居り、日本の舞臺にも上されたことがあるが、實際、ツルゲネエフ（ママ）の作品中で、舞臺に上し得る唯一のものであらう。それ程に、この作の構成は戯曲的である。(11)〔傍

点引用者〕

「來らんとするロシアの大革命」とは、一九一七年のロシア革命のことを念頭に置いているものと考えられる。世界を震撼させた大事件は、ちょうど田中純の翻訳が刊行される前年に起こったのであった。「大正浪漫」というのどかな言葉とは裏腹に、この時代は革命と社会主義の影にも縁取られていたことを忘れてはならない。

## 3．鳶色の靄、あるいは芥川龍之介の見た火花

### 「レニン」をめぐるアフォリズム

この時代を生き、この時代とともに死んだと言える芥川龍之介も社会主義への屈折した関心を示している。

彼の遺稿の中に「僕の瑞威（スキツツル）から」という題のもとにまとめられた一連の詩がある。「信條」からはじめて、「レニン第一」、「レニン第二」、「レニン第三」、「カイゼル第一」、「カイゼル第二」、「カイゼル第三」、「手」「生存競争」、そして「立ち見」まで、アフォリズム風の詩が並んでいるが、そこからは革命と社会主義、何よりレーニンに対する彼の関心の浅からぬところを看て取ることができる。

レニン第三

誰よりも十戒を守つた君は
誰よりも十戒を破つた君だ。

誰よりも民衆を愛した君は
誰よりも民衆を軽蔑した君だ。

誰よりも理想に燃え上がつた君は
誰よりも現實を知つてゐた君だ。

君は僕等の東洋が生んだ
草花の匂のする電氣機関車だ。(12)

手

諸君は唯望んでゐる、
諸君の存在に都合の善い社會を。

この問題を解決するものは
諸君の力の外にある筈はない。

ブルジョアは白い手に
プロレタリアは赤い手に
どちらも棍棒を握り給へ。

ではお前はどちらにする？

僕か？　僕は赤い手をしてゐる。
しかし僕はその外にも一本の手を見つめてゐる、
——あの遠國に飢ゑ死したドストエフスキイの子供の手を。

註　ドストエフスキーの遺族は餓死せり。(13)

つてゐたレニン」を「源頼朝や徳川家康に可なり近い」「東洋的な政治的天才」と呼び、「東洋の草花の馨りに滿ちた、大きい一臺の電氣機關車」に喩えるまでしながら、ロシア文学がわが国に与えた影響の大きさと日露両国民の親近性との関係について次のように述べていることに注目すべきであろう。

近代の外國文藝中、ロシア文藝ほど日本の作家に、——と云ふよりも寧ろ日本の讀書階級に影響を與へたものはありません。日本の古典を知らない青年さへトルストイやドストエフスキイやトゥルゲネフやチェホフの作品は知つてゐるのです。我々日本人がロシアに親しいことはこれだけでも明らかになることでせう。〈…中略…〉近代の日本文藝が近代ロシア文藝から影響を受けることが多かつたのは勿論近代の世界文藝が近代のロシア文藝から影響を受けることが多かつたのにも原因があるのに違ひありません。しかしそれよりも根本的な問題は何かロシア人には日本人に近い性質がある爲かと思ひます。我々近代の日本人は大きいロシアの現實主義者たちの作品を通して（durch, through）兎に角ロシアを理解しました。どうか同様にロシア人諸君も我々日本人を理解して下さい。〈…中略…〉千八百八十年以後の日本は大勢の天才たちを生みました。それ等の天才たちは或は Walt Whitman のやうに人間に萬歳の聲を

## 「露訳短篇集の序」

芥川龍之介のロシアに対するいささか強迫的とも呼べそうな関心の持ち様には多分に革命や社会主義との関わりで考えられるべきものがあるのは確かだが、その一方で芥川によるロシア文学受容には、どこか不思議なほどの親近感や懐かしさといった、個人的な感覚・感情に由来する面があることも見逃せない。

たとえば、彼の作品のロシア語訳がソ連で刊行されることに合わせて用意された「露譯短篇集の序」（昭和二年＝一九二七年（14））の中で、「最も理想に燃え上つたと共に最も現實を知

送り、或はFlaubertのやうに正確にブルヂヨアの生活を寫し、或は又世界中にひとり我々の日本にだけある、傳統的な美を歌ひ上げてゐます。若しわたしの作品の飜譯を機會にそれ等の天才たちの作品もロシア人諸君に知られるとしたらば、それは恐らくはわたし一人の喜びだけではありますまい。この文章は簡單です。しかしあなたがたのナタアシアやソオニアに我々の姉妹を感じてゐる一人の日本人の書いたものです。どうかさう思つて讀んで下さい。(15)〔傍点引用者〕

それから何年かつた後、僕は白柳秀湖氏の「離愁」とか云ふ小品集を讀み、やはり歩兵の靴から出る火花を書いたものを發見した。(僕に白柳秀湖氏や上司小劍氏の名を敎へたものも或はヒサイダさんだつたかも知れない。)それはまだ中學生の僕にも僕自身同じことを見てゐたせゐか、感銘の深いものに違ひなかつた。僕はこの文章から同氏の本を讀むやうになり、いつかロシヤの文學者の名前を、——殊にトウルゲネフの名前を覺えるやうになつた。それ等の小品集はどこへ行つたか、今はもう本屋でも見かけたことはない。しかし僕は同氏の文章に未だに愛惜を感じてゐる。殊に東京の空を罩める「鳶色の靄」など、云ふ言葉に。(16)〔傍点引用者〕

中学時代の芥川にツルゲーネフの名を教えたのは、社会主義者としても知られる白柳秀湖だったと作家自身が述べているのは興味深い。そして、次節で明らかになるように、子細に見てみると、「鳶色の靄」という言葉も白柳秀湖が『離愁』の中で『その前夜』を扱った文章に由来するものであることが知れるのである。

## 「火花」

芥川龍之介とロシア文学というと、トルストイとツルゲーネフのあいだの心理劇を描いた『山鳴』(大正一〇年＝一九二一年)がよく知られているが、大正末から昭和初めにかけて発表された『追憶』の中の「火花」(大正一五年＝一九二六年一二月)という文章の中にこんな一節がある。

やはりその頃の雨上りの日の暮れ、僕は馬車通りの砂利道を一隊の歩兵の通るのに出合つた。歩兵は銃を肩にしたまま、黙つて進行をつゞけてゐた。が、その靴は砂利と擦れる度に時々火花を發してゐた。僕はこのかすかな火花に何か悲壯な心もちを感じた。

## 4．武蔵野のヱレン、あるいは白柳秀湖「枯れ野のまぼろし」

### 白柳秀湖と『離愁』

芥川が右で触れていた白柳秀湖の『離愁』は、明治四〇年（一九〇七）一〇月刊行の言わばエッセイ集で、ロシアの文学と作家が詳しく紹介されている。

その中で白柳秀湖は、ロシア文学の生命の源は「闊大にして荒涼、漠々として蒼茫たる北欧大平原の風景」であると指摘して、ツルゲーネフの描写法について次のように述べている。

> 由來平原の風景は『印象主義』の描寫法を以てすべく、また『自然主義』、『實寫主義』を以てすべし、『ゴルキー』が北歐平原の風景を描寫し來るや、正に印象法を以てし、『ツルゲネフ』が之をなすに於ては、『自然主義』を以てす、『ゴルキー』の筆致は雄健にして皺法に富み、『ツルゲネフ』に至りては纖麗、緻密なる線を用ひて廣濶なる視野を最も慧巧に且つ大膽に描寫し得たるが如き趣あり。
>
> 露西亞の文學をいふもの先づ必ず此北歐大平原を語らざるものなし、自然の感化も亦偉大なりといふ可し。(17)〔傍点引用者〕

白柳秀湖がこの書の中に「北歐の双星」という大きな章を設けて、ツルゲーネフとトルストイを比較しながら論じていることからも、ツルゲーネフが重要視されていることがよく分かるであろう(18)。

作家の生涯と「四大傑作」を論じた節では、『その前夜』について次のように評価している。

> 『オン、ゼ、イーブ』は一八六〇に出たので、ヱレンという露西亞型の健全な、優雅な少女とインザロフといふ波蘭の志士との間の悲壯な戀を寫したものであつて、此篇はツルゲネフの自然の描寫に對する技倆を代表すべき作として持て囃されて居る。自分の文壇の友などもベニスの海の景色や、劇場の處、畫室のあたりを、殆ど語を盡して激賞して居る。(19)

### 「枯野のまぼろし」

白柳秀湖の『離愁』の中で『その前夜』を幻想的な筆致で紹介しているのが、巻頭から二番目に置かれた「枯野のまぼろし」という文章である。これは、「筑波颪」の吹く「武蔵野」で見た幻影の話で、語り手である「自分」の目の前に『その前夜』の女主人公「ヱレン」が現れるという趣向になっている。

空の靜かな霜日和の午後、この曠原は屡大氣の變化をうけて、鳶色の靄に包まれる事がある。

若し身を切る様な筑波颪が、黒土の香のする武藏野の煙塵を掲げて、行人の影を没する事が無かつたならば、蕭條たる枯野の逍遙も決して春秋の興樂に劣らないであろう。(20)

もはやお気づきであろう。「花火」の中で芥川が愛惜をもって思い出していた「鳶色の靄」は、こんな所に顔を出していたのだ。芥川と『その前夜』との不思議な因縁と呼ぶべきか。

**恍惚の谷**

さて、「自分」が「南郊のとある岡」をたどり、「灰色の裸體の森」の「小徑」を進み、「影の疎な櫟林に」歩み入り、「熊笹の岡」をだらだらと下りると、目の前に「稍廣い池」があった。「自分」は杉の木立の草を藉いて、氷の解ける音を聞きながら、いつしか「恍惚の谷」に陥る。この時ふと落葉を踏むものの気配に驚いて振り返ると、そこには一人の気高い、二十歳あまりの乙女が立ちつくしていた。大理石よりも白い彼女の面は、明かに北国の系統を示していた。彼女は口を開いて『おゝ自由の友よ、革命の友よ、御身は妾を忘れ給ひしか、妾は一夜、かのベニスの港にて分れまゐらせしエレン也』と言う。

エレン！おゝ乙女はかのエレンであつた。彼女は北歐の自然の精華を一身に凝らして、現世の偏見と迷妄との外に人となつた清洒端麗の乙女であつた。(21)

「自分」は「エレン」自身の口から彼女の身に起きた「美しき昔語」を聞かせてくれるよう彼女に乞う。彼女の言葉の中に作品のタイトルこそ出てこないが、「エレン」、「シュビン」、「ベルゼネフ」、「インザロフ」、「ベニス」、「ブルガリア」等の言葉から他ならぬ『その前夜』の物語世界と知れる。

彼女が「インザロフ」との恋に落ちた顛末を語るのを聞きながら、「自分はエレンが其美しき面に稍羞恥の色を帶びながら語る其をりの心的叙述の巧みなるに、殆ど恍惚として我を忘れた」。

**幻影の街**

「エレン」と「インザロフ」は「ベニス」に渡って彼の故国の同志がもたらすはずの旗上げの知らせを待ちわびながら、楽しい旅行の歓楽に酔っていたが、「インザロフ」の肺の病はもはや致命的なものになっていた。「いかに果敢なかりける我世の春よ」と「エレン」は嘆く。

かくてエレンは其詩的の快辯を揮ふて、當時の追懐をかた

り、インザロフと共に伊太利の畫堂を訪れた時の光景や、それから劇場に行つて、さる女優がトラビアタのヴイオレツタに扮して、苦しい血を吐くような咳をする處を演ずる、其聲が觀覽席に居るインザロフの眞の咳と相和すといふ悽愴な光景を殆ど畫の如くに語つた。(22)

やがて「エレン」が「インザロフ」の最期を看取り、彼の棺を載せたゴンドラが港を漕ぎ出るさまが描き出される。

只見るベニスの港頭、天暗く、水黒く、一穂の紅燈闇に照り、婆娑として油の如き水に落ちるの時、一艘の小舟は一個の棺を載せてしのびやかに漕ぎ出でた。船には金髪、黒瞳、花の如き佳人と、頑健、鐵の如き革命の志士とが、無限の痛恨無限の悲愁を抱いて、棺蓋に身を横へて居る。(23)

最後に、「自分」はすべてが幻であったことを悟る。

突如として鵯がけたゝましく叫んだ。

自分のレベリーは忽焉として破れた。自分は依然目黒を一里と距てない、南郊のとある古池のほとりに倨して居る。何時の間にか日も傾いて風が出たのか、かの鳶色の靄はとうに消えて、冬の夕日が青く對岸の松林を斜に照して居る。

氷の解ける音はもうやんでしまつた。自分は此時夢の醒めたあとの様な、激しい悪寒に、思はず戰慄を覺えたのである。(24)

## 武蔵野という装置

ここで白柳秀湖は二葉亭の『あひゞき』を通して「武蔵野」を再発見した国木田独歩の体験と手法を（おそらく意識的に）継承しているように見える。独歩と秀湖に共通しているのは、ロシアの大平原や田園地帯、田舎の自然とわが国の風景を結ぶ媒介項・舞台装置として「武蔵野」を捉える態度ないし手法である。

そこで「武蔵野」は、言ってみれば、文学者たちが自分たちの文学的空想を自由に盛り込むことのできる容れ物として立ち現れている。そこには、武蔵野を一種の比喩としてロシアの自然と文学を語る，あるいは逆に、ロシアの田舎をいわば借景として武蔵野を描き出すというレトリックないし文学的戦略が看て取れるのではないだろうか。霧や靄、それらによって呼び起こされる幻影は、二つの世界をつなぎ、二重性を演出するための仕掛けとなっているのだ。

さらに言えば、そこにはロシア人、それもとりわけ文学作品

に登場する女性主人公たちに対する、ほとんど血縁的なものまで含まれるのではないかと思われるような親近感が表明されており、読者たちとの間で暗黙の内に共有されたそのような親近感を前提に、文学的空想が節度をもって展開されている。

その意味で、芥川龍之介は白柳秀湖から「トゥルゲネフの名前」を教えられただけでなく、ロシア文学の女性主人公たちに対する名状しがたい親近感、東京・武蔵野の空の彼方に昔のロシア文学の世界を覗き見るという感覚とレトリックを引き継いだと言えるのではなかろうか。

## 5. 遠いこだま、あるいは島崎藤村『夜明け前』考

### 「ルウジンとバザロフ」

田中純の『その前夜』が出た二年後（大正九年＝一九二〇年）、「ルウジンとバザロフ」というエッセイの中で島崎藤村は次のように述懐している。

> ツルゲネエフと言へば、私達が英譯で初めてあの露西亞の小説家を知つた頃の青年時代の記憶と引きはなしては考へられないくらゐだ。若かつた日の友達仲間でツルゲネエフの愛讀者でない者は無かつたくらゐに、私達はあの樺色の表紙のついた二冊の『獵人の手記』なぞに讀み耽つたことを覺えて居る。私は友達と集つて『處女地』や『父と子』に就いて語り合つた青年時代の感激を今も猶あり〳〵と思ひ起すことが出來る。その時の友達の言つた言葉なぞで今だに私の耳に殘つて居るものもある。(25)

懐旧の情に駆られた藤村は、もう一度ツルゲーネフを読むべく、銀座で田中純訳の『ルーヂン』と谷崎精二訳の『父と子』を買い求めて読み返している(26)。このエッセイの中では専らこの二作が取り上げられ、長篇小説では『煙』と『處女地』にもわずかに触れられているが、『貴族の巣』と『その前夜』については全く言及がなく、あまり関心も寄せていなければ評価も低かったのだろうかとも思われる。

### 遠いこだま

しかし、筆者がひそかに関心を寄せずにいられないのは、昭和になってから発表された藤村の『夜明け前』（昭和四年～一〇年）と『その前夜』の関係である。大変近似したタイトルに象徴されるように、両者には何か大きな変革の「前夜」にとどまっているという意識が通底している(27)。

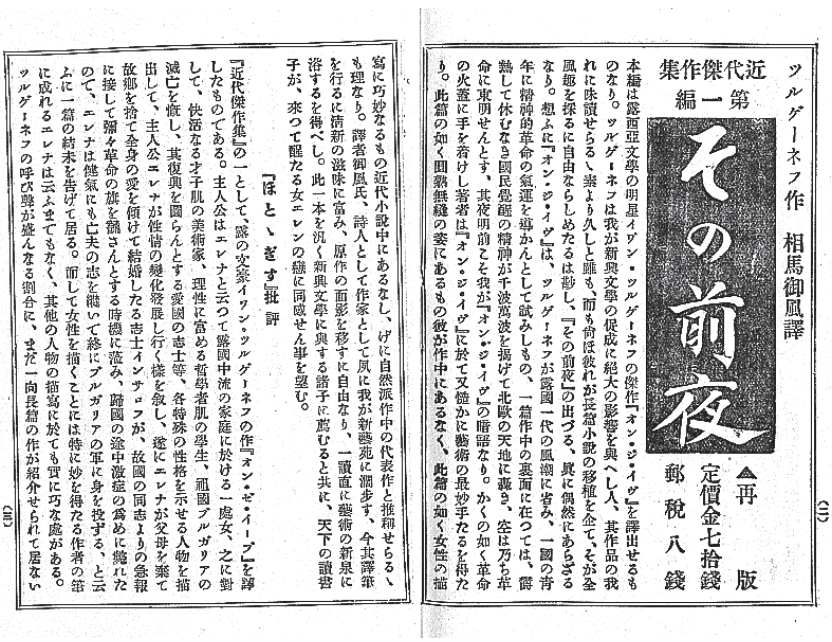
物語の設定や展開にも似通った所がある。驚くべき事に、ふたつの物語は全く同じ年の出来事から始まっているのだ。『そ

の前夜』が「一八五三年の暑い夏の日」に始まり、翌年四月のインサーロフの急死（＋約五年後の後日談）までの物語であるのに対し、『夜明け前』にはペリーの黒船を迎えた一八五三年の夏から、明治憲法発布の三年前に当たる一八八六年に主人公が狂死するまでが描かれており、主人公の病死や狂死によって迎える幕切れはいずれも暗澹としている。

『夜明け前』の語り手が「人々は進歩を孕（はら）んだ昨日の保守に疲れ、保守を孕んだ昨日の進歩にも疲れた。新しい日本を求める心は漸く多くの若者の胸に萌して來たが、しかし封建時代を葬ることばかりを知つて、まだまことの維新の成就する日を望むことも出來ないやうな不幸な薄暗さがあたりを支配してゐた（28）」と言えば、『その前夜』は「ロシアには新しい人間が出て来るだろうか」というシュービンの問いかけにかつて「出て来る」と答えたウヴァール老人が、今回は指を動かして、謎のような眼ざしを遠くに注ぐところで終わっている。ここには、特定のイデオロギーや宗教をファナティックなまでに信奉することができず、未来に楽天的になれない作者たちの姿があるように感じられる。

## 『その前夜』広告

ここで、吉江孤雁の『ツルゲーネフ短篇集』（明治四一年＝一九〇八年）の巻末に置かれた、御風訳『その前夜』の広告文



ツルゲーネフ作　相馬御風譯

近代傑作集　第一編

その前夜

▲再版　定價金七拾錢　郵税八錢

本編は露西亞文學の明星イヴン・ツルゲーネフの傑作『オン・ジ・イヴ』を譯出せるものなり。ツルゲーネフは我が新興文學の促成に絶大の影響を與へし人、其作品の我れに味讀せらるゝ素より久しと雖も、而も尚ほ彼れが長篇小說の移植を企て、そが全風趣を採るに自由ならしめたるは尠し、『その前夜』の出づる、眞に偶然にあらざるなり。想ふに『オン・ジ・イヴ』は、ツルゲーネフが露國一代の風潮に省み、一國の青年に精神的革命の氣運を導かんとして試みしもの、一篇作中の裏面に在つては、鬱熱して休むなき國民覺醒の精神が千波萬波を揭げて北歐の天地に轟き、空は乃ち革命に東明せんとす、其夜明前こそ我が『オン・ジ・イヴ』の暗語なり。かくの如く革命の火蓋に手を着けし著者は『オン・ジ・イヴ』に於て又慥かに藝術の最妙手たるを得たり。此篇の如く圓熟無縫の姿にあるもの彼が作中にあるなく、此篇の如く女性の描寫に巧妙なるもの近代小說中にあるなし、げに自然派作中の代表作と推稱せらるゝも理なり。譯者御風氏、詩人として作家として夙に我が新藝苑に濶歩す、今其譯筆を行るに清新の滋味に富み、原作の面影を移すに自由なり、一讀直に藝術の新泉に浴するを得べし。此一本を汎く新興文學に與する諸子に薦むると共に、天下の讀書子が、來つて醒たる女エレンの戀に同感せん事を望む。

『ほとゝぎす』批評

『近代傑作集』の一として、露の文豪イヴン・ツルゲーネフの作『オン・ゼ・イーブ』を譯したものである。主人公はエレナと云つて露國中流の家庭に於ける一處女、之に對して、快活なる才子肌の美術家、理性に富める哲學者肌の學生、祖國ブルガリアの滅亡を慨し、其復興を圖らんとする愛國の志士等、各特殊の性格を示せる人物を描出して、主人公エレナが性情の變化發展し行く樣を叙し、遂にエレナが父母を棄て故郷を捨て全身の愛を傾けて結婚したる志士インサロフが、故國の同志よりの急報に接して彌々革命の旗を翻さんとする時機に蒞み、歸國の途中激症の爲めに斃れたので、エレナは健氣にも亡夫の志を繼いで終にブルガリアの軍に身を投ずる、と云ふに一篇の結末を告げて居る。而して女性を描くことには特に妙を得たる作者の筆に成れるエレナは云ふまでもなく、其他の人物の描寫に於ても實に巧な處がある。ツルゲーネフの呼び聲が盛んなる割合に、まだ一向長篇の作が紹介せられて居ない

図２：相馬御風訳『その前夜』の広告（吉江孤雁『ツルゲーネフ短篇集』より）

（執筆者未詳）に興味深い一節を見つけたので紹介したい。

想ふに『オン・ジ・イヴ』は、ツルゲーネフが露國一代の風潮に省み、一國の青年に精神的革命の氣運を導かんとして試みしもの、一篇作中の裏面に在つては、鬱熱して休むなき國民覺醒の精神が千波萬波を掲げて北歐の天地に轟き、空は乃ち革命に東明せんとす、其夜明前こそ我が『オン・ジ・イヴ』の暗語なり。(29)［傍点引用者］

藤村がそれなりに話題になった御風訳の『その前夜』を知らなかったとは考えられない。また、この節の冒頭で示したように、彼は田中純訳の『ルーヂン』を銀座で見つけて読んでおり、同じ訳者の『その前夜』にも目を通していた可能性は低くない(30)。いずれにしても、藤村は『その前夜』という日本語のタイトルにも親しんでいたはずである。

『千曲川のスケッチ』にはタイトルからして『猟人日記』の、『春』には『処女地』からの影響の可能性があると言えるのならば(31)、『夜明け前』と『その前夜』の関係についても議論を深める余地は十分にあるように思える。

## 6．残照 ―『その前夜』翻訳略史

### 「心の花」

明治四一年（一九〇八）二月から六月（ちょうど相馬御風訳の『その前夜』が出た時期の前後に重なる）にかけて、雑誌「心の花」の第一二巻第二号・第四号・第五号・第六号に、「さすらへびと」なる筆名の訳者による『その夕べ』という翻訳が載ったことがあった(32)。ここにはツルゲーネフの長篇小説の第一章から第四章に相当する箇所が訳出されている。

「その一」と題された、原作の第一章に相当する箇所の冒頭を以下に示してみよう。

一千八百五十三年の夏のいと暑き日のことなりき。クウントソホより程遠からぬモスクォ川の岸なる、丈高き菩提樹の蔭に、二人の若人草敷きて横はれり。一人は年の頃二十三歳餘りと覺しく、丈高く肥えたり。劣りてかつ稍曲れるその鼻、高きその額、廣く結べるその口には笑をつゝめり。彼はあふむけに打臥し、その小さき灰色の眼を半ば閉ぢて、物思はしげに遠きあなたを眺めたり。他の一人はうつむけになり、双の手もて、その攀れたる髪の毛美しき頭を支へぬ。彼もまた遠方を眺めいれり。この人はその友

よりは稍年たけたれど、はるか若やぎて見ゆ。彼の頰には僅かに髭生ひそめ、その顎には薄き柔らき毛見ゆ。彼が爽かなる丸顔の小作なるがうちに、柔和なる鳩色の眼のうちに、愛らしく結べる唇のうちに又小さき手のうちに、何となう幼げなる美しさと人を惹付くるやうな優しさとあり。彼の身のまはりなるものはなべて、健やかなる若人の幸福なる氣軽さ——無頓着や、自負や、不遠慮や、はた若人の愛嬌など、を示せり。彼は子らが人々に賞められ見らる、時に爲すが如き、見まはし打笑みて頭を傾けぬ。彼は寛衣の如く作られたる寛やかなる白き上衣を着、その細き首には青色の布を纏へり。古びたる麥藁帽子は、彼のかたへに草の上に投げ出されたり。

彼が友は、打見たるところ寧ろ彼とはふけたり。その痩せぎすなるを見ては、何人も彼もまたその友の如く、しかく、幸福にかつ自ら樂めりとはえ想はざるべし。彼の打臥したる様は醜し、その鉢ひらけたる大なる頭は、彼の長き首の上に無細工に載れり。彼の手、短かき黑の上衣をもて究屈に装へるそのからだ、及び蟋蟀の後足の如くもたけたる長き兩脚など、彼の姿は凡て醜し。しかも猶、彼が善良なる教育うけたる人なることは、何人も認めうべし。彼が氣のきかざる様子のうちにも、良き教育の痕あり。その平凡なる、否寧ろや滑稽なる面も、その性のあたゝかさと、平生の思慮深さとを示せり。この人の名はアンドライ、ペトロウイッチ、ベルシ子ツフと言ひ、彼の友なる髪の毛美しき若人は、パウル、ヤコブリッチ、シユウビンとぞ言ふなる。

『何故に君はうつむきて臥せざるにか、わが如くに。』シウビン口を開きぬ。(33)

「クウントソホ」、「モスクォ川」、「アンドライ」などの表記が見られることから、ロシア語原文からではなく、ドイツ語訳などからの重訳と思われるが、「さすらへびと」が誰なのかは謎のままである。

**田中純以後の翻訳**

次に、田中純の後に出た翻訳(単行本)について見てみよう。大正一〇年(一九二一)に冬夏社から出た『ツルゲーニエフ全集二巻』の中に、牧一也訳の『その前夜』が収められている。昭和三年(一九二八)には中央出版社の「袖珍世界文学叢書一一」として、品川準訳の『その前夜』(イヴン・ツルゲネーフ作)が出た。

米川正夫は『その前夜』の訳を何度も出しているが、昭和五年(一九三〇)に隆章閣から出た『ツルゲーネフ全集五巻』の中にあるのが、おそらく最初のものだろう。

昭和一二年（一九三七）には三笠書房から原久一郎が『初恋』と『その前夜』を抱き合わせた翻訳（トゥルゲーニェフ作）を出している。昭和一八年には石井秀平訳『その前夜』が高山書院から出た。

戦後の昭和二六年（一九五一）には、湯浅芳子訳の『その前夜』が岩波文庫から出た。そして、昭和三七年（一九六二）に筑摩書房から出た「世界文学大系三一（ツルゲーネフ）」に収められた、金子幸彦訳の『その前夜』が、おそらく活字になった最後のものということになろう。それから半世紀あまりが過ぎようとしている(34)。

## 結びにかえて――近代日本の白楽天

『その前夜』はツルゲーネフの長篇小説のなかで最初に完訳されて発表されたもので、かつ明治時代に二度完訳された作品（一度目はロシア語原典から、二度目は英訳からの重訳）であるが、その後この作品は、わが国におけるツルゲーネフ受容の主流にはならなかったし、ツルゲーネフもロシア文学受容の中心から外れて行った。これは、明治から大正にかけてのある時点で特異な方向に舵を切った、わが国の文学史の流れとも無縁ではなさそうだ。

自然主義後期の代表作家とされる國木田独歩、田山花袋、島崎藤村は、いずれも詩人として出発し、やがて小説家に転じた。そして、彼らはいずれも若い頃ツルゲーネフに傾倒したことが知られている。わが国における「自然主義」の誕生と伸張にツルゲーネフが寄与しているのだとすれば、その後ツルゲーネフはその自然主義によって切り捨てられた、とさえ言えるのかも知れない。ツルゲーネフは「余計者」から始めて行動的人物を描こうとしたが、日本の自然主義は逆に、「非凡人」を求めてその挫折から「余計者」の世界に引き籠もってしまったかのように見える。

それでも、作家たちは「小説家の小説家」（ヘンリー・ジェームズ）と呼ばれたロシアの文豪から小説技法は大いに学び、パトスは秘かに受け継いだのかも知れないし、「自然主義」の時代を過ぎるあいだにツルゲーネフが完全に葬り去られた訳ではなかった。

詩人から出発して散文作家になったもう一人の男、佐藤春夫が昭和二四年（一九四九）に発表した「近代文学の展望」（第四章「外国文学の影響」）の中から次の一節を引用して、小論の筆を擱くことにしたい。

> ゾラは多くの問題の種を蒔き模倣や換骨奪胎も尠くないのに、その収穫は決して豊富とは云へなかつた。ゾラ以前に渡来して早く歓迎されたツルゲニェフも自然主義時代に

はあつさりもうふるいで危うく葬られさうなところを「その前夜」や「処女地」「父と子」などの新訳によつて、社会小説家、風俗小説家としてでもいふ新しい角度からのツルゲニェフの新展望が生じて、その反権威、反習俗が見直され命脈を保つたといふのも、やはり民族の好尚に適合するところが多いためであつたらう。ツルゲニェフは今日でもまだ新訳或は覆刻版が出て最近まで読者を失つてゐないらしい。渡来以降既に半世紀以上を経てこの状態を保つてゐるのは新陳代謝の劇しい日本の読書界にあつては希有な一例で、ツルゲニェフはそれ近代日本の白楽天とも云ふべきか。(35)

**註**

(1) 主なものを挙げると――

木村毅「ツルゲェネフと日本文壇」(『砂濱散策』信正社、一九三六年、四三～六二頁)。

安田保雄「日本におけるツルゲーネフ」(『比較文学論考　続篇』学友社、一九七四年、二四～五三頁)。

佐藤清郎「あとがきにかえて――ツルゲーネフ受容の歩み――」(『ツルゲーネフの生涯』筑摩書房、一九七七年、二六〇～二六八頁)。

柳富子「明治ジャーナリズムのなかのツルゲーネフ」(川戸道昭・榊原貴教編『ツルゲーネフ集Ⅰ』(『明治翻訳文学全集『新聞雑誌編』四十』)大空社、一九九六年、三七五～三八三頁)。

(2) あまり知られていないが、日本の読書界に衝撃を与えた『あひゞき』発表に先立つこと二年、二葉亭四迷を名乗る前の長谷川辰之助は『父と子』の翻訳を試み、坪内逍遙の仲介で出版される手はずだったが、なぜか上梓に至らず、原稿も失われた。この幻の翻訳作品は「春廼家朧助訳・冷々亭杏雨訳」『虚無黨形氣』といい、原作の四分の一くらいの抄訳であったと見られるが、逍遙によれば「其譯は私の知る限りの最初の口語體の小説譯文であった」とされ、実現していればわが国の文学史が書き換えられたかも知れない。

(3) 『ルーヂン』(一八五六)、『貴族の巣』(一八五九)、『その前夜』(一八六〇)、『父と子』(一八六二)、『煙』(一八六七)、『処女地』(一八七七)

(4) この翻訳ははじめ「日本之時事」第二三・二四号に『憂國憐才 美人草』という題で第三回(原作の第三章に相当)まで掲載されたところで連載を打ち切られ、その後間もなく同じく博文館が出していた文芸雑誌「やまと錦」の第七号から第一三号までに『あらしの花 美さほ草紙』という題で改めて掲載されている。

(5) この長篇小説の明治期の三種の翻訳について委細は別稿参照。相沢直樹「三つの『その前夜』――明治期におけるツ

ルゲーネフの翻訳と受容をめぐって――」、『図説翻訳文学総合事典（全五巻）』第五巻：日本における翻訳文学（研究編）、川戸道昭・榊原貴教（編）、大空社、二〇〇九年、一七二～一九一頁。

（6）委細は拙著『甦る『ゴンドラの唄』――「いのち短し、恋せよ、少女」の誕生と変容』新曜社、二〇一二年、一四二～一四九頁参照。

（7）名倉生「須磨子の三役」（「東京朝日新聞」一九一五年四月二十九日、第七面）。

（8）ツルゲーネフの小説『その前夜』と芸術座の『その前夜』劇および『ゴンドラの唄』との関係については、前掲拙著『甦る『ゴンドラの唄』』で詳しく論じた。

（9）筆者の調べたかぎりでは、刊行年は『獵人日記』から『ルーヂン』、『初戀』、『その前夜』までが大正七年（一九一八）、（6）の『父と子』が大正八年（一九一九）、（5）の大貫晶川訳『煙』のみが大正二年（一九一三）である。

（10）国会図書館の書誌情報にも「ツルゲーネフ全集」という記載は見あたらない。

（11）ツルゲエネフ作、田中純譯『その前夜』新潮社、一九二〇年、一～二頁（初版は一九一八年）。原作の発表年についての誤り（正しくは一八六〇年）は相馬御風訳の『その前夜』や楠山正雄の『その前夜』劇脚本の前書きと同じで、おそらく英訳者ガーネットの誤りをそのまま引き継いだものであろう。

（12）『芥川龍之介全集』第九巻、岩波書店、一九七八年、四七二頁。

（13）同、四七三頁。

（14）この「序」の発表時期等について『芥川龍之介全集』の「後記」（五三八～五三九頁）には次のように記されている：「單行本未詳。本全集は普及版全集第八巻所収本文に據り、その文末日付「（昭和二年一月）」に従いここに配した。／昭和二年（一九二七）一月二十一日の野村治輔宛書簡に「飜譯の件は勿論よろしい。序文も同封してお送りします。どうかよろしく」とある。」

（15）同、三七三～三七四頁。

（16）同書、第八巻、一四三～一四四頁。

（17）白柳秀湖『離愁』隆文館、一九〇七年、一六二頁。

（18）なお、木村毅は白柳秀湖の『黄昏』（明治四十二年発表）に「ツルゲェネフの投影があつて、一読に値する」と述べているが、具体的に『黄昏』のどういう所のことなのか、筆者には探り当てられなかった。cf. 木村毅、前掲書、六二頁。

（19）白柳秀湖『離愁』二〇二頁。

（20）同、一〇頁。

（21）同、一四頁。

（22）同、一八頁。

（23）同、一九頁。

（24）同、一九～二〇頁。

（25）『藤村全集』第九巻、筑摩書房、一九七八年、一九頁。なお、雑誌「雄辯」に発表時の原題は「飯倉だより」。

（26）いずれも新潮社が「ツルゲーネフ全集」の名の下に刊行したもので、『ルーヂン』は大正七年に、『父と子』は大正八年にそれぞれ初版が出たばかりであった。

（27）明治維新（一八六八年）、農奴改革（一八六一年）

（28）『藤村全集』第一二巻、筑摩書房、一九七八年、五三五頁。

（29）吉江孤雁『ツルゲーネフ短篇集』内外出版協會、一九〇八年（初版は一九〇七年）。

（30）田中純訳の『その前夜』は新潮社の「ツルゲエネフ全集」第四篇に位置づけられているが、その巻末の広告によれば、同全集第五篇には大貫晶川訳『煙』が入っている。一方、大正二年に同社の「近代名著文庫」第四篇として出た大貫晶川訳『煙』は、「遺友」木村荘太郎の前書きによると、その出版について「洋行前御多忙な中で島崎藤村先生の多大な斡旋を蒙つた」ものであり、藤村がこの間の出版事情に疎かったとは到底考えられない。

（31）前者は安田保雄「『猟人日記』と近代日本文学（一）――田山花袋と島崎藤村」（『比較文学論考　続篇』学友社、一九七四年）六八～七一頁、後者は同「詩人から小説家へ――独歩・花袋・藤村とツルゲーネフ――」（『比較文学論考　第三篇』学友社、一九八一年）二九～三〇頁。

（32）タイトルは初回のみ「その夕」。巻号によっては、また同じ巻号でも本文と目次で「さすらへひと」や「さすらへ人」などと、訳者名の表記が異なることがある。

（33）さすらへびと「その夕（ツルゲ子フ）」、『心の花』第一二巻第二、竹柏會、一九〇八年、二一～二二頁。なお、同巻の目次には「さすらへ人」、「その夕（ツルゲネーフ）」、『こゝろの華』という表記で記されている。

（34）筆者が調べ上げた『その前夜』翻訳のリストを巻末の別表に掲げた。

（35）『定本佐藤春夫全集』第二三巻、臨川書店、一九九九年、二五八頁。「もうふるい」は「もう古い」（という一言で片づけられてしまう）意と推察される。

別表：『その前夜』翻訳のあゆみ

| タイトル | 訳者 | 刊行年 | 雑誌／出版社 | 備考 | 作者名 |
|---|---|---|---|---|---|
| 憂国憐才<br>美人草 | 五七居士<br>（佐波武雄） | 明22（1889） | 「日本之時事」<br>博文館 | 「日本之時事」<br>４月１日，４月11日 | 露國都爾給呆<br>（ツルケ子ーフ）氏著 |
| あらしの花<br>美さほ艸紙 | 五七居士<br>（佐波武雄） | 明22（1889） | 「やまと錦」<br>博文館 | 「やまと錦」第７号～第13号 | 露國ツルゲー子フ原著／原稿 |
| 戀と戀 | 相馬御風 | 明40（1907） | 「文庫」 | 『オン・ジ・イブ』<br>第５章 | ツルゲニエフ |
| 二人の友 | 相馬御風 | 明40（1907） | 「文庫」 | 『オン・ジ・イブ』<br>第１章 | ツルゲニエフ |
| エレンの日記 | 相馬御風 | 明41（1908） | 「文庫」 | 『オン・ジ・イブ』<br>第16章 | ツルゲニエフ |
| その夕 | さすらへ人 | 明41（1908） | 「心の花」 | 原作第１章に相当 | ツルゲ子フ／ツルゲネーフ |
| ヴエニスの春 | 相馬御風 | 明41（1908） | 「ハガキ文學」 | 『オン・ジ・イブ』<br>第33章 | ツルゲニエフ |
| その夕べ | さすらへ人 | 明41（1908） | 「心の花」 | 原作第２章に相当 | 作者名なし |
| その夕べ | さすらへ人 | 明41（1908） | 「心の花」 | 原作第３章に相当 | ツルゲネーフ |
| その夕べ | さすらへ人 | 明41（1908） | 「心の花」 | 原作第４章に相当 | ツルゲ子フ |
| その前夜 | 相馬御風 | 明41（1908） | 内外出版協會 | 近代傑作集第１編 | ツルゲネーフ |
| その前夜 | 楠山正雄 | 大４（1915） | 新潮社 | （脚本） | ツルゲエニェフ |
| その前夜 | 田中純 | 大７（1918） | 新潮社 | ツルゲエネフ全集<br>４編 | ツルゲエネフ |
| その前夜 | 牧一也 | 大10（1921） | 冬夏社 | ツルゲーニエフ全集２巻 | ツルゲーニエフ |
| その前夜 | 品川準 | 昭３（1928） | 中央出版社 | 袖珍世界文学叢書<br>11<br>ツルゲネーフ集 | イヴン・ツルゲネーフ |
| その前夜 | 米川正夫 | 昭５（1930） | 隆章閣 | ツルゲーネフ全集<br>５巻 | ツルゲーネフ |
| その前夜 | 米川正夫 | 昭７（1932） | 春陽堂 | 世界名作文庫 | ツルゲーネフ |
| その前夜 | 品川準 | 昭10（1935） | 文新社 | 世界文学名著文庫 | ツルゲーネフ |
| その前夜 | 米川正夫 | 昭11（1936） | 六芸社 | 新修普及版　ツルゲーネフ全集３巻 | ツルゲーネフ |
| その前夜 | 原久一郎 | 昭12（1937） | 三笠書房 | 初恋：その前夜 | トゥルゲーニェフ |
| その前夜 | 米川正夫 | 昭12（1937） | 金星堂 | 真実の書 | ツルゲーネフ |
| その前夜 | 米川正夫 | 昭13（1938） | 新潮社 | 新潮文庫 | ツルゲーネフ |
| その前夜 | 石井秀平 | 昭18（1943） | 高山書院 | | ツルゲーネフ |
| その前夜 | 石井秀平 | 昭22（1947） | 高山書院 | | ツルゲーネフ |
| その前夜 | 米川正夫 | 昭22（1947） | 共和出版社 | ツルゲーネフ名作選集３ | ツルゲーネフ |
| その前夜 | 米川正夫 | 昭24（1949） | 共和出版社 | ツルゲーネフ全集7 | ツルゲーネフ |
| その前夜 | 米川正夫 | 昭25（1950） | 世界書房 | | ツルゲーネフ |
| その前夜 | 湯浅芳子 | 昭26（1951） | 岩波書店 | 岩波文庫 | ツルゲーネフ |
| その前夜 | 米川正夫 | 昭26（1951） | 角川書店 | 角川文庫 | ツルゲーネフ |
| その前夜 | 米川正夫 | 昭28（1953） | 創元社 | ツルゲーネフ作品<br>４巻ノ内 | ツルゲーネフ |
| その前夜 | 金子幸彦 | 昭37（1962） | 筑摩書房 | 「世界文学大系」<br>31（ツルゲーネフ） | ツルゲーネフ |

# Beyond the dark-brown hazy sky over Tokyo
# －An essay on the history of Japanese translations and the reception of Turgenev's *On the Eve*

Naoki AIZAWA

In this paper I trace the history of the Japanese translations of Turgenev's less famous novel *On the Eve*（1860）and investigate how it was received in Japan.

While Meiji-era Japan saw two full Japanese translations of the novel, the Taishō era saw both a seemingly secondhand translation by Jun Tanaka（1918）, and also a dramatization by Masao Kusuyama（1915）for performance by the Art Theater（*Geijutsu-za*）in Tokyo.

I consider some features of the reception in Japan of *On the Eve*, by introducing Shuko Shiroyanagi's fantastic 1907 essay on the novel to which Ryūnosuke Akutagwa made a meaningful allusion, as well as some anonymous translations in the journal *Flower of the Heart*（1908）.

Finally, I point out some likenesses between the titles of Tōson Shimazaki's novel *Before the Dawn* and Turgenev's *On the Eve*, and discuss the possibility of Tōson's having borrowed from Turgenev.

山 形 大 学 人 文 学 部

# 研 究 年 報

第 12 号

目　　次

**論　　文**

対人葛藤解決における間接方略の遍在性
……福　野　光　輝・土　橋　美　幸…… 1

ペテン歯医者と雄鶏合戦
——ハンス・ゼーバルト・ベーハム作《ケルミス大版画》のモティーフ分析——
……元　木　幸　一…… 21

制御理論を用いた在庫管理モデルの一解析——リードタイムが変動する場合
……西　平　直　史…… 43

無限に拡大する「民族性」
——ヒトラーとピブーン，２人の独裁者の言説をめぐって
……渡　辺　将　尚…… 53

鳶色の靄の彼方に—『その前夜』の翻訳と受容をめぐる試論
……相　沢　直　樹… 1 (170)

**調査報告**

三重県玉城町における地域公共交通システム——元気バスの調査報告——
……砂　田　洋　志…… 67

**平成25年度研究・教育活動報告** …… 83

**投稿規程** …… 148

平 成 27 年 3 月

山 形 大 学 人 文 学 部

# Faculty of Literature & Social Sciences, Yamagata University Annual Research Report

Vol. 12

## CONTENTS

**Articles**

Ubiquity of indirect strategies in interpersonal conflict management
..... Mitsuteru FUKUNO・Miyuki DOBASI..... 1

Swindler Dentist and Pole-Climbing for Rooster: An Analysis of Han Sebald Beham's *Large Kermis* Woodcut ..... Koichi MOTOKI..... 21

An Analysis of Inventory Management Models Using Control Theory
—a case when the lead time is varied ..... Naofumi NISHIHIRA..... 43

Das sich unendlich vergrößernde Volkstum
—Diskurse der zwei Diktatoren, Hitler und Phibun ..... Masanao WATANABE..... 53

Beyond the dark-brown hazy sky over Tokyo
—An essay on the history of Japanese translations and the reception of Turgenev's *On the Eve*
..... Naoki AIZAWA... 1 (170)

**Investigation Report**

An Investigation Report on Regional Public Transportation System of Tamaki Town in Mie Prefecture — An Investigation Report on Genki Bus — .....Hiroshi SUNADA... 67

**2013 Academic Year Report on Reseach and Education** ..... 83

**Requirements for Contributors** ..... 148

MARCH 2015

Faculty of Literature & Social Sciences
Yamagata University